ASLE-Japan／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

October 31, 2017, No. 43

【役員名簿（2017年10月現在）】（五十音順）

代　表：結城　正美（金沢大学）
副代表：小谷　一明（新潟県立大学）
顧　問：上遠　恵子（レイチェル・カーソン日本協会）
　　西村　頼男（阪南大学名誉教授）
事務局長：高橋　綾子（長岡技術科学大学）
　　辻　　和彦（近畿大学）
事務局補佐：
　　浜本　隆三（福井県立大学）
　　日野原　慶（大東文化大学）
会　計：大野　美砂（東京海洋大学）
　　河野　千絵（日本大学・非）
監　事：村上　清敏（金沢大学名誉教授）
ニューズレター編集委員：
　　佐々木　郁子（龍谷大学）
　　澤田　由紀子（甲南大学・非）
　　豊里　真弓（札幌大学）
会誌編集委員：
　　相原　優子（武蔵野美術大学）
　　塩塚　秀一郎（京都大学）
　　芳賀　浩一（城西国際大学）
　　平塚　博子（日本大学）
　　Bruce Allen（清泉女子大学）
コンピューターセンター：
　　岩政　伸治（白百合女子大学）
　　北国　伸隆（長崎外国語大学）
　　山城　　新（琉球大学）
評議員：浅井　千晶（千里金蘭大学）
　　池田　志郎（熊本大学）
　　太田　雅孝（大東文化大学）
　　上岡　克己（高知大学名誉教授）
　　茅野　佳子（日本大学・非）
　　黒崎　真由美（関東学院大学）
　　塩田　　弘（広島修道大学）
　　管　啓次郎（明治大学）
　　高橋　龍夫（専修大学）
　　高橋　　勤（九州大学）
　　高橋　昌子
　　巽　　孝之（慶応義塾大学）
　　中川　僚子（聖心女子大学）
　　波戸岡　景太（明治大学）
　　林　　直生（滋賀大学）
　　巴山　岳人（和歌山大学・非）
　　横田　由理（大東文化大学・非）
　　吉田　美津（松山大学）
院生代表：笠間　悠貴（明治大学・院）
広　報：喜納　育江（琉球大学）
　　塚田　幸光（関西学院大学）
　　松永　京子（神戸市外国語大学）
研究助成：岡島　成行（青森山田学園）
　　管　啓次郎（明治大学）
　　乳井　昌史（早稲田大学）
　　野田　研一（立教大学名誉教授）
　　山里　勝己（名桜大学）
　　結城　正美（代表）

言葉の伏流水

代表　結城　正美（金沢大学）

同じ県内の能登半島西部の産業廃棄物最終処分場計画について、恥ずかしながら私はつい最近まで、いわば他人事のように傍観するだけで積極的に関わってこなかった。

能登は、世界農業遺産に登録された里山里海を誇る一方で、限界集落が深刻化している地域である。産廃最終処分場予定地とされている輪島市門前町大釜地区の全住民は、2006年に土地が売りに出された当時、４世帯８人、まさしく限界集落であった。将来に希望が持てない住民全員が移転を決めた上での土地売却であったという。これに飛びついたのが産廃事業者であった。東京に本社をおくタケエイという会社と大成建設がほぼ半々で出資して2006年８月に設立された株式会社「門前クリーンパーク」が、最終処分場建設に向けて地元の説得にあたってきたという。

輪島市議会は処分場建設に関して二度にわたり反対の決議を出しており、市民はこの問題は終わったものと思っていた。しかし2016年６月、市議会が突如、計画を事実上容認する議決をしたことから事が急変する。環境アセスメントの手続きがとられ、住民は反対運動を起こして住民投票実施に持ち込むが、投票率が50%を超えず不成立に終わった。今年の暮れには、環境アセスメントの結果に基づき県の判断が示される予定であるという。

産廃最終処分場建設は「法的受託事務」にあたる。国が定める法的手続きに沿って調査された結果に基づく判断には必ず従わなくてはならないということです、と後述する県庁職員は説明してくれた。要するに、環境アセスメントの結果、処分場建設を許可する判断が示されれば誰も文句は言えない、ということらしい。

冒頭で記したように、私は輪島の問題に情報の次元でしか接してこなかった。しかし、最近になって猛省し調べ始めている。放ってはおけないという実感が沸々とわいてきたからだ。この変化をもたらしたのは、「輪島の産業廃棄物処分場問題を考える会」（以降、「処分場問題を考える会」と略）から「石川県環境審議会委員」に送られた手紙である。私も委員の一人として手紙を受け取った。

委員になった理由は何であれ（同僚の女性から委員交代を打診されたのがきっかけで、県庁の担当者が私の専門分野を知って依頼し

たわけではなさそうである)、環境審議会は「専門家」が県の環境に関わる問題を知事に「答申」する重要な委員会である。処分場問題を考える会から手紙が届いたのは、環境審議会で私が委員を務める部会が開催される二日前のことであった。輪島市産業廃棄物最終処分場建設問題検討委員会の資料、WWFジャパン、日本自然保護協会、日本野鳥の会の３団体が連名で知事に宛てた意見書が同封された封筒を開け、手紙を読んだ時、当事者の切羽詰まった様子がひしひしと伝わり、これまで新聞やSNSで見聞きしていた問題の切実さが肌で感じられた。環境アセスメントは環境審議会の別の部会の審議事項であり、私が出席した部会では産廃処分場問題は議題になかったが、部会終了間際、この件に関して県民から寄せられている訴えに関する県の対応を問うたところ、環境審議会委員宛に文書が送られたことは県も知っており、説明します、ということで、関心のある数名が残って県庁職員から説明を受けた。

県の説明は、「法」に従って手続きを進めているということに終始した。法的手続きをとり然るべき時期に住民からの意見聴取期間を設けたが、建設に反対する意見は寄せられなかった、とか、環境評価に関しては環境審議会の然るべき部会で審議・了承済みである、とか。処分場問題を考える会が訴えている住民の不安とまったく交差しない言葉に私は苛立った。住民投票が成立しない現状に示唆されるように、自らの声を上げる文化が希薄な地域で意見聴取を行なっても住民の真意が汲み取れるはずはなく、反対意見が寄せられなかったという理由で住民の同意を得たというのはおかしい、と意見を述べても、しかし県としては法に従って手続きを進めていますので、の一点張り。同席していた委員には生態学者や日本野鳥の会の会員もいて、彼らは絶滅危惧種の生息地の調査と検証の不備を指摘したが、依然として、県は法に従って手続きを進めている、の繰り返し。

県と輪島市民は互いに通じない外国語で話しているように思えます。県民の不安に応える責任が県にはあるわけですから、せめて言葉が通じる場を作ろうとする姿勢が必要なのではないでしょうか。開き直って私はそう発言した。一瞬、場の空気が変わったように感じたのは気のせいだったのだろうか。県庁職員は私の発言には取り合わず、法的手続きに依拠した説明を続けた。

水俣に産業廃棄物最終処分場建設が計画された時、水俣市民の人口数を超える反対署名が集まった。処分場問題の闘争の最中で当選した市長が建設反対派だったことも事業を中止に追い込んだ大きな要因であったが、作家・石牟礼道子の影響力も計り知れない。石牟礼の「水俣から生類の邑を考える――産廃最終処分場反対の立場から」（平成17年12月）と題された文章はメディアでもよく取り上げられたので、目にした方は少なくないであろう。「なぜ、水俣が引きうけ手のない産廃最終ゴミの『受け皿』にならなければならないのか。飲み水は環境ホルモンやアスベストなどに汚染されるおそれ充分です。天と地の最後のめぐみであった天然の湧水にまで毒を注入するつもりか」と糾弾口調で始まる石牟礼の文章は、後半、包み込むような柔らかさをもった言葉で織られてゆく。

> 水俣川の川口に立って考えます。南の高みに矢筈山が見えます。中腹あたりの湯のつる川の源流から川口まで十・五キロ、水俣市街のやや左を突っ切っておだやかな川があります。この川がなんと豊かな恵みを人々にもたらしていたことか。先祖代々、心も体も養ってもらいました。死者たちの形見の声を少しばかり綴ってみます。
>
> 沖から見れば、川口の大廻（うまわ）りの塘（とも）はうねうね動きよりました。芒の穂の光って。野菊の花々も綴れて。狐の眷属たちの往ったり来たりして。貝採りにゆく時は人も狐も顔なじみで。顔見ればどこの狐かわかりよった。所の顔がございますよな。向う縁（べた）の天草狐は長崎系統で鼻筋のすうっとして。猿郷狐は小柄で猫のごたったですよ。鳴き声にも、所の訛のございます。狐同士で後（あと）先見て遊び遊びゆきよりました。「今日はどこゆきな」と声かけますと、「はい、よか磯ゆき日和で」と返事しよりましたよ。

ここに描かれているのは、石牟礼文学でお馴染みの森羅万象との交感の世界にほかならない。水俣に行ったことがなくても何となくわかるような、個々人の深いところで流れている共通の伏流水とでも言うべき言葉の世界。この「伏流水」のイメージは、異文化との対話をめぐる梨木香歩の言葉――「文化の垣根の深いところで流れている伏流水が出会うような、魂の邂逅」（『私たちの星で』）――から得たものである。見解の差異に影響されない深みで流れている伏流水から生まれた言葉と出会い、自らの伏流水の流れを感じる時、傍観者であった者はもはや傍観者ではありえず、対話・ダイアローグへの参加者となる。

ダイアローグには、言葉を通って流れるという語源的意味合いがある。法の言葉と生活の言葉が分断されたままではダイアローグは一向に望めない。言葉の伏流水がさぐりあてられねばならない。これはエコクリティシズムの課題であり、「研究者」「専門家」である私たちの責務であろう。

【大会報告】

2017年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会

（2017年8月24日［木］～25日［金］@清泉女子大学［東京都品川区］）

2017年８月に開催された全国大会は、４年ぶりに東京での開催となりました。２日間の開催期間中に、２つの基調講演、個人発表、ラウンドテーブル、院生企画（８頁に報告があります）そして会場構内でのUraban Nature Watchingまで行われました。会員の方々に両日の内容について報告して頂きました。（写真は明記されていない限り、編集委員による撮影です）。

＜第一日目：８月24日＞

●個人発表１・２

江川　あゆみ（目白大学）

松岡幸司氏の発表「シュティフターの作品における故郷ボヘミアの森の記憶」では19世紀オーストリアの作家シュティフターの二作品『みかげ石』『森ゆく人』について、「場所」、とくに人間のアイデンティティを形成するうえで重要な場所である「故郷」を軸に人間との密接な関係が論じられた。

『みかげ石』の語り手は実家の前の大きなみかげ石に導かれ、幼い頃の記憶を語り始める。祖父とともにとなり村を往復する道すがら、祖父は幼い語り手に様々なものの名前をつけさせた。祖父によって語られる祖父の記憶、先祖の記憶、土地の記憶は語り手のなかに故郷の記憶として降りつもり、語り手を多層的で奥行きのある故郷ボヘミアの森の記憶と一体化させてゆくのであった。

『森ゆく人』は「森ゆく人」と呼ばれる老人ゲオルグの半生を描いた作品である。作品中での時間軸は時系列順ではなく、老人のゲオルグがボヘミアの森の中へと消えてゆく最期を描く１章から始まり、青年期を描いた２章、冒頭のボヘミアの森での暮らしに繋がる３章で構成されている。

この循環的な時間軸はそのままボヘミアの森の生態学的な循環を表しており、ゲオルグはボヘミアの森に人生の枯れ枝を落とすことのできる第二の「故郷」を見つけるのであった。

発表のスライドとともに映し出されるボヘミア・オーベルプラーンの風景に尽きることない詩興をそそがれたシュティフターの故郷への想いが汲まれた。

続く発表は田中美保子氏による「Liz Berry, *The China Garden*：次世代の地球の守護者（アース・ガーディアン）へのメッセージ」である。

本作は17歳の主人公クレアの転地先サマセット州レイヴンズミア屋敷での不思議な体験とEarth Guardianとしての目覚めと成長を描いたヤングアダルト小説であり、発表では本作が若者を惹きつけるのに成功している２つの仕掛け―舞台設定とファンタジーの仕掛けを軸に論じられた。

舞台設定でとりわけ重要なのは古い屋敷のイギリス式風景庭園で、クレアはそこで幻想的な体験を重ねる。屋敷と周囲の自然は人間が手を加え、祈り、物語を紡いできた場所であり、クレアはここで伝説を聞き、遺跡に触れ、身体感覚をともないながら場所と親密な関係を築いていく。

多角的に読める本作にファンタジーの要素を加えているのはクレアの霊感である。心身を重ねた場所が原子力関連施設に売られんとする衝撃で力に目覚め、Earth Guardianとしての自己を受け入れ成長していく姿は若い読者の背中を押すものとなるだろう。脅威に対峙する想像力のしなやかさをみる作品である。

松岡・田中両氏の採り上げた作品は数世代にわたる土地の記憶とかかわりながら、空間から場所へと認識が変容する過程を描いている点で奇しくも共通している。日本におけるエコクリティシズム研究黎明期、度々引用されたWendell Berryの至言―“If you don’t know where you are, you don’t know who you are.”

をいま一度想起しつつ、「場所」が紡ぐ多彩な物語の一篇を味わうことのできる発表であった。

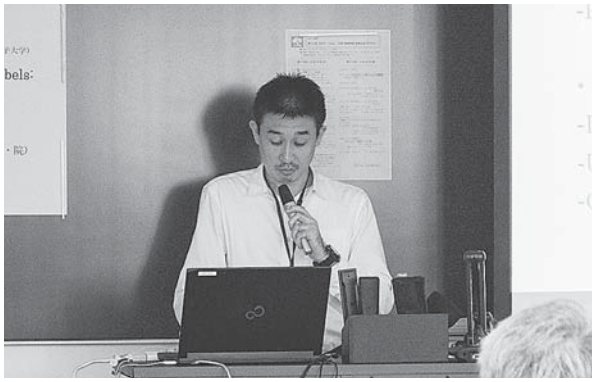
●個人発表３・４

日野原　慶（大東文化大学）

実体としての自然とそれを描くための言語との間には、埋めがたい断絶がある。ゆえに自然という対象は、言語によって再構成された結果として、文学テクスト内に存在することになる。その再構成のされ方には、テクストそれぞれの間に違いがある。その違いを明らかにし、それがいかなる事柄に起因するものなのかを探る。「水俣病の言説における海の表象：『海の牙』と『苦海浄土』との比較を中心に」と題された賀樹紅さんの発表と、“Wilderness as a Haven for the Rebels : Reality in both Fiction and Non-Fiction” と題された戸張雅登さんによる発表はともに、環境文学批評が担うべき上のような重要な使命についての認識に支えられていた。その使命の実現が試みられる時、フィクション／ノンフィクションの区分は、恣意的に引かれた国境線のようなものにすら思われてくる。おふたりの発表を聞き、それを実感した。

賀さんの議論は、水俣の海とそこで営まれる生活を表象するための言語、そして、その背後にある自然観に焦点を当てた。『海の牙』の根底には、自然と人間との対立を前提とする二元論的な理解がある。「崖」や「牙」という言葉が使用された表現の分析によって、それが明らかにされた。対照的に、『苦海浄土』の根底にある自然観とは、海とそこで暮らす人々との共生を前提としたものである。生活と分かち難く結びついた環境としての海は、文字通り漁民の目を「借りて」捉えられたかのような具体性を通して表象される。環境中心主義といった言葉で換言することがはばかれるほどの豊饒なる具体性――それを、このテクスト特有の詩学として論じた点に感銘を受けた。

戸張さんによる発表は、『イントゥ・ザ・ワイルド』における荒野の表象に焦点を当てた。ひとりアラスカに消えた若者をめぐるこちらの作品も、言語による自然の再構成という問題と無縁ではない。作者であるクラカワーが、マッカンドレスによる「野性」への旅をいかにして語ろうと試みているのかという問題意識の所在を感じられる発表であった。物理的現実としていかように定義されようとも、語られた荒野はいつだってそのような現実的側面から遊離するものである。これを基本認識として、戸張さんは作品のプロット構造を詳細に分析した。そして、異世界への旅、その領域を支配する異原理との接触、それによる再生と帰還―このような神話的プロット構造を、『イントゥ・ザ・ワイルド』に見てとることが可能であると明快に示した。



この結論は、かつての原型批評が主張したような神話的原理の遍在性を証明するというよりも、荒野とそこへの旅を物語化する際に依拠されざるをえない文学的形式・因習の側面に光を当てるという点において、たいへん興味深いものであった。おふたりの研究者としてのこれからの活躍に期待大である。

●基調講演１

「環境文学への視座―日本古典文学をめぐって」

講師：小峯　和明 氏（立教大学名誉教授・中国人民大学高端外国専家）、
渡辺　憲司 氏（自由学園最高学部長・立教大学名誉教授）
司会：野田　研一（立教大学名誉教授）

山田　悠介（東洋大学・非）

司会の野田研一氏による講師紹介から始まった「基調講演１」。はじめに、日本中世文学・東アジアの比較説話を専門とされる小峯和明氏が、環境文学の対象と方法について発表された。冒頭で、「退潮路線」にある人文学や文学研究の意義が厳しく問われているという現況に言及した上で、環境文学の対象が６つのカテゴリー（A. 天体、気象、四季、B. 名所、聖地、C. 生活空間、D. 災害･怪異、E. 食文化、F. 動植物･異類）に分類、整理できることを提示し、具体的な作品を挙げながらDEFの詳細と研究課題について説明された。災害の様子が克明に記された『方丈記』などの古典のテクストの表現力・喚起力に目を向けること、食のことばやイメージを、文書、絵画、絵巻などの「表現」から明らかにすること、東アジアの本草学を視野に入れることの重要性などが論じられ、最後に、環境文学が多分野を架橋する役割を担いうるジャンルであるこ

と、環境文学の観点から「文学」を再編成することに環境文学研究の大きな意義があるという見解が披瀝された。

日本近世文学がご専門の渡辺憲司氏はまず、中世と近代の狭間に位置する「近世」という時代が日本独自の区分であることを指摘し、その特徴を、出版文化の成立、作品数と読者層の飛躍的増加、紀行文学の変化といった観点から概説された。その上で、小峯、野田両氏とともに企画中だという環境文学アンソロジーの構想と課題について報告された。具体的には、アンソロジーの６つのテーマ（Ⅰ. 動物との交流、Ⅱ. 植物との交流、Ⅲ 災害、Ⅳ. 都市とツーリズム、Ⅴ. 異文化との遭遇、Ⅵ. 食文化の多様性）に該当する近世のテクストを挙げながら、物語世界や演劇世界における動物表象、災害と飢饉、「カノン」の相対化、貝原益軒や本田利明の再評価など幅広いテーマに論究され、近世文学を環境文学という枠組みからいかに問い直しうるか、その道筋を提示された。そのなかで、いわゆる「日本的美意識」や、俳句や和歌を通して構築された「自然」、「四季」、また、それらの「美」とされるものを客観視し、再考することの必要性をくり返し説かれていたことが非常に印象的だった。

自明と思われていること、「常識」とされていることを問い直す。環境文学研究の学術的／社会的意義はそこにある。小峯、渡辺両氏のご発表を貫くこの〈視座〉が、企画中のアンソロジーにも反映されているであろうことは想像に難くない。その完成を待ち遠しく思うとともに、この〈視座〉に基づく環境文学研究の重要性をひしと感じた基調講演だった。

Urban Nature Watching @清泉女子大学

大会二日目の総会の後、大会実行委員のBruce Allen氏の案内で、会場の清泉女子大学構内にある、旧島津侯爵邸であった本館（東京都指定有形文化財）を見学した。現在も講義で一部は使用中とのことである。

引き続いて緑豊かな奥庭へ。広い芝生とその周辺の日本庭園の更に奥に、回廊のような森の散策道が続いていた。グレープフルーツが自生し、奥庭の一角にはマリア像が静かに佇んでいた。

奥庭でひときわ目をひくのは、推定樹齢200年以上の楓（フウ）の樹［マンサク科落葉高木・品川区指定天然記念物］である。享保の時代に渡来した台湾フウの種類で、幹周りは３ｍもある。この場所が旧仙台藩藩邸の頃から「高尾もみじ」と呼ばれ、その名をはせていたそうである。

丁度よい曇り空で、都心のUrban Natureは、参加者に生気と憩いのひと時をもたらしてくれた。Watching Tourの最後に、奥庭の主・フウとの記念の一枚を撮影した。

＜第二日目：８月25日＞

●個人発表５

高橋　実紗子（聖心女子大学・院）

大会二日目に開催されたUrban Nature Watchingで、旧島津邸の二階に位置する教室から外の林を眺めていたとき、なにか奇妙な寂しさを覚えた。お屋敷の白い大窓が、「あのヒースのなかに立てば」と声を荒げて窓を開けさせようとした、病床のキャシーを思い出させたのだろうか。馬場理絵氏による「『嵐が丘』の動物たちと動物的な人びと」の発表は、エミリー・ブロンテ著『嵐が丘』に登場する〈動物〉および〈動物的な人びと〉、とくに〈犬〉に焦点を当てて本作品の革新性を再評価するものであり、作中の動物表象のさらなる検討の可能性を訴えるものでもあった。

まず馬場氏は、各所に登場する犬のモチーフが、人物形成のみならず物語の展開にも大きく寄与していると指摘する。キャシーが犬に噛まれてリントン家で手当てを受けるという、運命的な場面はもちろんのこと、そもそも語り手ロックウッドを嵐が丘に引き込んだのは犬だという。ペットとして動物を所有することを欲し、ペットのように愛される幼少期のリントン兄妹、虐待される仔犬に重ねられたイザベラなど、犬と人間の近接性を示す例は多岐におよぶ。

第二部では、主人公ヒースクリフの「犬らしさ」が論じられた。「狂犬」、「オオカミ」などと表現される彼は、犬として扱われ、犬のように行動する。例えば、死に瀕したキャシーとの再会の場面では、彼女から引き離されることを拒んで「噛みつかんばかりに」威嚇している。そしてこのような犬のモチーフこそ、ヒースクリフとその後継者ヘアトンをより堅固に結びつけるものでもある。馬場氏は、『嵐が丘』という二世代にわたる物語のなかで、まさに中心といえる人物に犬の姿が重ねられていることを強調する。このような人間性と動物性の激しい倒錯が、主人公という物語の核において起こっているのならば、人間－動物の問題は、中心たるヒースクリフだけに留まらず、小説全体に浸透しているということなのだ。

第三部では、ヒースクリフとともに育ったキャシーだけでなく、穏やかなエドガーやイザベラ、ロックウッドさえも〈動物的〉な側面を持つことが示され、『嵐が丘』の誰しもが、ヒースクリフというもっとも〈動物〉に近い存在から強烈な影響を受けていることが明らかとなった。馬場氏は、人びとがこの中心、もともとは外部からきたヒースクリフと関わることによって、プロットが推し進められ、作品全体に動物と人間の倒錯が広がっていくのだと結論づける。フロアとの意見交換では、「動物」「動物性」「野生」といった語の多義性、「犬」という存在の再定義の可能性などが検討された。これまでのエミリー・ブロンテ批評においてしばしば自然という概念でくくられていた、動物あるいは〈犬〉なる存在を開放することで新たな『嵐が丘』の解釈を提示した本発表は、本作が、嵐が丘の〈人間〉たちと、ヒースクリフという〈犬〉との出会いを発端とする、いわば異種遭遇物語的な要素を含んでいることをも示唆していたように思う。

●ラウンドテーブル
「環境カフェ―
文学と科学による社会コミュニケーション」

浅井　千晶（千里金蘭大学）

全国大会二日目の午後、個人発表と波戸岡景太氏による新刊のプレゼンテーションに続いて、ラウンドテーブル「環境カフェ――文学と科学による社会コミュニケーション」があった。国立環境研究所の多田満氏の司会のもと、多田氏、筑波大学下田臨海実験センターの戸祭森彦氏、九州大学21世紀プログラムの学生である田中迅氏の３名により、環境カフェの意義と目的、現状、今後の課題が報告された。

まず、多田氏が環境カフェの概要を説明した。環境カフェは多田氏が2015年から実践している営みで、専門家による講演会のような一方向のコミュニケーションではなく、双方向・対話型で、サイエンス・カフェよりさらに少人数（６～８人程度）にすることで、専門や職業の枠を超えて市民が交流し、対話により理解と共感をめざす実践である。主に大学内や公共のカフェで開催し、専門家などからの話題提供ののち、参加者がそれぞれの経験を公平に聴き合うことを目指しているそうだ。詳しくは*Newsletter* 40号の多田氏の報告を参照されたい。

次に、戸祭氏から、下田臨海実験センターのある海

辺で2015年10月11日に開催された環境カフェの事例報告があった。R・カーソンの随筆「海辺」から抽出した生態学的問題「動物はどうして特定の場所に棲んでいるのか」「彼らとその生息環境を結びつけているものはなにか」を起点に、フィールド調査から得た知識を「生きる」知恵とみなし、人間や共生のビジョンにつなげる内容であった。ここで短い質疑応答の時間をとった後、三番目に九州大学の学生である田中氏が、大学生が運営できる実践モデルとして、九州大学の新キャンパスで今年始めた「九大環境コミュニケーションサークル」の活動を報告した。このサークルは大学教員の知を手がかりに環境カフェを開くだけでなく、文芸部と連携して「科学詩」を作成したり、高校生や地元住民と関わるなど、つながりを重視した活動を展開中で、現時点での課題と今後の方針が報告された。高校生の時にアメリカへの留学経験があるそうだが、学部１年生の田中氏のすばらしい行動力に感嘆し、今後の活躍を期待したくなる内容であった。

今回のラウンドテーブルは90分と比較的時間にゆとりがあり、発表後のフロアとの質疑応答はきわめて活発だった。人文系研究者・教員の立場から質問や助言があり、哲学カフェを運営している会員からは「共感」できない人がいた場合にどうするのかという質問もあった。個人的におもしろかったのは、自然科学の研究者が問いに結論を出そうとするのに対して、人文系研究者は問いに多様な解があることを前提にしているのが改めて浮き彫りになったことである。ラウンドテーブルを通じて自由な意見交換ができ、発表者にも参加者にも有益な時間であったと思う。

●基調講演２
「きわに立つ――環境としての私」

講師：田口　ランディ 氏（作家）
司会：結城　正美（金沢大学）

浜本　隆三（福井県立大学）

福島県川内村のヨシダさんの羊と山羊は、原発事故をきっかけに電力会社に「就職」した。放射能汚染で稲作できなくなった水田に並ぶ、11万枚のソーラーパネルの周囲で、下草を食べる「お仕事」だ。

事故直後、場所によって放射線量は、一時間あたり10マイクロシーベルトを超えていた。山羊、羊たちはみな断種され、村外への連れ出しも禁じられている。それでもみな生き延びて、さらに世の役に立っている。己の境遇にもの言わず、ただ食み、そして生きる……。

田口ランディさんは1999年、茨城県東海村で起こった臨海事故をきっかけに原発に「興味」をもった。賛否関係なく、ただ素朴に「興味」をもち、毎年、ダイアローグ研究会や川内村自由大学を催して、原発の問題と向き合ってきた。

その姿勢は「消極的」だったという。原発は、作家が関わるには危うい問題、「大文字の問題」である。賛否示さずどっちつかずの立場で、「あまり関わりたくない」、「精神的にちょっとしんどいこと」と思いながらも、対話を続けてきた。

今年、田口さんの関心は、高レベル放射性廃棄物の処分方法とその処分地の選定にあった。国は他国に倣い、放射性廃棄物をガラスに溶かし込み、幅40センチ、長さ130センチほどの円筒形の固化体を成型し、地下深度300メートル以下に埋設する計画でいる。

放射性廃棄物の最終処分の問題は難しい。日本では原子力発電環境整備機構が担当し、岐阜県の瑞浪と北海道の幌延に実験施設を設け、地下500メートルの竪穴を掘り、技術研究を重ねている。施設見学では案内役の科学者の、地層処分は安全だという言葉が重ねられる。だが、見学者にはそろって、解せない「もやもや」が残る。

このもやもやとは、つまるところ、既定の路線に立ち、ものごとをきっちりと進めていく、徹頭徹尾、ロジックを貫く政府関係者の姿勢に起因する。そう気づいた田口さんは、このロジックの流れに乗ることができず、政府主催の会議において、方向性も目的も不明の、「変な意見」を言っては場を乱し、しだいに孤立して、「きわ」へと追いたてられていった。

孤軍奮闘するなか、きわに立って見えてきたもの。それは、「命は命として、自由に命している、というすっごい実感」であった。ちょうど頭のなかで、ロジカルなソフトウェアとは違う、また別のソフトウェアが立ち上がる感覚……。

この言語を越えた説明しづらい実感は、コスモス、マインド、ブラフマン、真如や仏性など、科学者や宗教家が名づけるものに通じる。もしくは、喜納昌吉が歌う「花」、石牟礼道子が描く「花」であるかもしれない。

この、命はそれでよし、という「絶対肯定」のような実感があればこそ、現実と折り合いをつけながら、発狂しそうなロジックの世界にも、踏みとどまることができるという。田口さんの達観は、おなじく「きわ」に立ちながらも、ひょうひょうと草を食む、あのもの言わぬ山羊や羊たちの、孤高の胸の内を物語っているのだろう。

【ASLE-J-Grad Journal（院生組織だより）】

第23回全国大会　院生企画
院生ブックレビュー「動物への変身」

馬場　理絵（東京大学・院）

発表者は４名、高橋実紗子（聖心女子大学・院・博士２年）、馬場理絵（東京大学・院・博士２年）、三宅由夏（東京大学・院・博士３年）、笠間悠貴（明治大学・院・博士３年、写真家）である。以下に発表内容をまとめ、報告としたい。

高橋は、ジョン・ウェブスターの『モルフィ公爵夫人』（John Webster, *The Duchess of Malfi*［1623］）より、ファーディナンド公爵の狼への変身を取り上げた。この人物の変身は心理的な病であると診断されるが、変身は皮膚の内側という身体的なレベルにおいて起こるため、ここに初期近代の人々の関心、人間を如何に定義できるのかという問いの反映を見ることができると論じた。馬場は、『ジェイン・エア』（*Jane Eyre*［1847］）の主人公ジェインとバーサの緊張関係についての考察を示した。ヴィクトリア朝において想像力と飢えの感覚は、理性に対置する身体感覚とみなされ、それらが動物的感覚となって主人公のうちに動物への変身の恐怖を生じさせていると指摘した。三宅は、『ジェイン・エア』の語り直し作品であるジーン・リースの『サルガッソーの広い海』（Jean Rhys, *Wide Sargasso Sea*［1966］）より、バーサ＝アントワネットが作品の末尾で鸚鵡（＝人語を真似する動物）のイメージと重ねられる描写に、「オリジナルとコピー」「支配者と被支配者」の図式を反転させる装置としての「物まねmimicry」の力を読み解き、そこにポストコロニアル批評とエコクリティシズムの接点を示した。笠間は、ジェイ・アプルトンの『風景の経験』（*The Experience of Landscape*［1975］）より、狩りの行為になぞらえられる「眺望―隠れ場理論」に示される「風景の体験」に動物と人間の近接関係を可能にする視点を見出し、自らの撮影作品の解釈の方法に援用することで、これらを説明・解説した。

本企画により、専門の異なる院生たちが変身のテーマをともに考え、意見交換をすることで、人と自然の〈交感〉あるいは人と自然の関係性への考察を深めることができたと考えている。

【学会報告】

ASLE-US大会報告

岩政　伸治（白百合大学）

去る６月20日から５日間、デトロイトで開催されたASLE-USの大会に参加した。旅費を浮かせようと学生寮に宿泊、早朝に同室にいたシンガポールから来た院生のスマホから流れる目覚まし代わりのアニメ音楽で目覚めた私は２段ベッドから降りるつもりが足を滑らせ、椅子の角で足を強打、大会運営スタッフに病院に運ばれた。大会中は、「シンジは大丈夫か？」がスタッフの間で挨拶のように交わされ、ある意味で大会中もっとも話題の人物になってしまった。完全な言い訳であるが、かくして大会の報告ができるほど研究発表に参加することができなかった。今回は私が聞いた数少ない研究発表から、日本の研究者の間でも馴染みのあるアースラ・ハイザ氏の発表 “Narrative Cities and Ecological Actants” から私が学んだことについて報告したい。

ハイザ氏は、ナラティブにおける都市に着目し、登場人物に対する背景の概念について、環境批評的視点から一つの問題提起を試みた。チャイナ・ミエヴィルの『クラーケン』、オコラフォーの『ラグーン』という二つのSF都市小説を引き合いに出し、そこで描かれる行為体としての都市環境の役割について分析した。人類の半数以上が居住する生息環境としての都市という行為体は、ポストモダン小説以降、よりはっきりと前景化され、より自然志向であるとする。最近の都市のナラティブに内包されるものについて考察する上で、ハーバーマスのアクタントという概念を有効なツールとして提示、さらに、アクタントが単なるキャラクターを言い換えたものではなく、複数のキャラクターが同一のアクタントを構成することがあると指摘し、ギルデンスターンとローゼンクランツがストーリーの展開上まったく同じ役割を果たしていることを例として挙げられていた。ハイザ氏によると、アクタントは人間的なキャラクター以外の何ものかでもありうる。例えば神性、動物、地震や嵐のような無生物の行為体だったりする。

人類学者ラトゥールが望むのは、私たちが社会をある種のナラティブであるかのように観察することである。ラトゥールの優れた点は、社会学におけるアクタントの再概念化にあり、人とモノ、文明と自然を二項対立としてではなく、それらの相互関係から把握することを試みたことにある。この迂回路を経由して、アクタントの概念が、環境的側面から修正されたナラティブ理論として得られるのである。今回取り上げた、近代都市をめぐるナラティブは、おもに環境的側面において、文学の拡大する可変領域の一部である。風景は、行為体の一つの類型を持つものとして概念化される。身体が風景に対して浸透性をもつのではなく、風景自体が一種の行為体であると反対方向から考えるのだ。ガイアとか山になって考える、といった場所の精神を経由した風景は、登場人物と、それに隣接するものの間のどこかに位置していて、それこそが環境文学の一つの類型なのである。都市の物語もおなじ形式を踏襲する。これは、生息環境を論理とした文学の新しい構造形式であり、背景として特徴づけられたものをナラティブ・アクタントとして再概念化する試みであるとして発表は結ばれた。

【エッセイ】

台湾油症をめぐる報告文学

―『被遺忘的一九七九：台湾油症事件30年』（2010年）について

金　星（Jin Xing）（長崎大学・院）

1978～79年にかけて台湾でも、日本におけるカネミ油症事件と同様の油症事件が起こった。すなわち、PCBやPCDFなどに汚染された米糠油を摂取したことによる化学性食中毒事件である。台湾油症として認定された被害者は2000名以上に及ぶとされる。

この台湾油症を扱ったのが、現在フリーライターとして活動している台湾出身の陳昭如氏による『被遺忘的一九七九：台湾油症事件30年』（同喜文化出版、2010年）である。社会の闇を描き、人々に食品安全問題について意識させた本書は、出版当時大きな反響を呼んだ。

この作品の特徴は、ルポルタージュの中で文学的表現を効果的に用いていることである。構成は、「推薦序」「第１編　落幕的事件（法的に解決された事件）」「第２編　未落幕的故事（未解決の事件）」「附録」となっているが、例えば「第１編」では、台中県大雅郷の被害者たちの口述によって個々人の生活が描かれる。事件発生当時の新聞記事も引用されるこの章では、具体例は実名のまま記され、さらに、多くの科学的データや官庁からの数字により当時の状況が明らかになっている。続く「第２編」は陳氏がジャーナリストとして被害者及び関係者に対して行ったインタビューを通して、各人の人生観と将来に対する多様な考え方を示唆している。「附録」は、陳氏と台湾大学医学部教授・郭育良氏との対談を含み、科学的視点からPCB化学物質に関する医学的・社会的問題を分析している。このように、関連文献資料を整理し、被害者や関係者へのインタビューを行う一方で、陳氏は患者について書き記すとき、従来の「観察者」にとどまることを拒否する。語りのあらゆるところに融けこみ、事実と自身の想像を織り交ぜて患者の物語を語り、患者の苦しみや回想を読者に伝えている。

本書は、文学的な表現法によって人々に環境問題について考えさせる、現代の中国語・華僑文化圏の環境文学の先駆的作品といえるだろう。現在私は、日本のカネミ油症と台湾油症との比較研究を行いつつ、本書の日本語訳を進めている。今後も、日本、中国、米国などの環境文学の分析を通して、環境問題がどう認識されているか見ていきたい。

【ご著書紹介】

結城正美・黒田智（編著）『里山という物語　環境人文学の対話』

（勉誠出版、2017年６月）

旧知の北條勝貴さん（上智大学）から結城正美さんの存在を聞いていたので、金沢大学に着任してほどない2010年暮れに結城さんの研究室を訪ねました。結城さんは突然の来訪に驚いた様子でもあったが、厳冬と震災をはさんだ翌2011年３月28日には「環境言説をめぐる研究会」なる奇妙な勉強会が開かれました。集まったのは結城さんと生田省吾さん、村上清敏さん（本会の歴代代表ではないか！）、黒田の４名で、各々が思い思いに語る研究が底のほうで閑かに共鳴しあうのを感じて嬉しく、とりわけ結城さんと僕は「定年を間近にひかえた老大家を使わない手はない！」と目視で確認しあったことをよく覚えています。

でも、「環境言説をめぐる研究会」はこの１回こっきりで（いや、これから再開するのかもしれないが）、あのときの思いは２年半後の2013年７月20日にシンポジウム「里山×里海×文学」として結実することになります（本会初代代表野田研一さんを加えて）。幻想としての里山、故郷論、ゾーンとしての里山、里と山の相克。それは、里山の言説世界の襞に分け入り、里山という表象と環境の関係を考える新しい人文学的挑戦となりました。

しかし、同年秋の金沢大学学術図書出版助成の獲得に失敗したこともあって、本書の出版までにはいたずらに時日を経過し、予定していた論考のなかには賞味期限切れを待てずに収載を断念するものもでてきました。結城さんと僕とは、そのたびごとに何度も構想の練り直しを余儀なくされました。それでも、新たに小谷一明さん（本会副代表）らを執筆陣に迎え、快く鼎談に参加してくれた北條さんはじめ多くの方々が背中を押してくれました。こうしてあのシンポジウムで蒔かれた種は、４年近い歳月をへてようやく小さな花を咲かせました。それが本書です。風雪にさらされた花は、温室育ちの花よりもたくましい。ぜひご一読ください。

黒田 智（金沢大学）

【映画評】

『ハイジ　アルプスの物語』を観て

外山　知子（明治学院大学・非）

スイスの不朽の名作『ハイジ』を映画化したこの作品は、アルプスを気持ちよさそうに飛ぶ鷲に始まり、鷲に終わる。エンディングでハイジが鷲のように飛ぶ真似をして手を羽ばたかせるのを見て、これらのシーンは雄大なアルプスの風景を映すだけでなく、ハイジが自由に羽ばたく人生を暗示しているのだ、と観る者は悟る。女性の開放、それは監督が原作から読み取った第一のメッセージである（映画のプログラム掲載「アラン・グスポーナー監督来日インタビュー」参照）。このメッセージは、ハイジが山に来て、服を脱ぎ、裸足になることにも込められている。

自由に羽ばたくには読み書きできる力が必要である。それが第二のメッセージだ（同上）。ハイジは“おんじ”ともペーターともグラウビュンデン方言しか話さない。冬になるとヤギ使いのペーターは学校に通うために山に来なくなる。ペーターに会えないのをハイジが寂しく思うことを知っていても、誰になんと言われようとおんじはハイジを学校にやらない。ハイジ自身もペーターの言うようにヤギ使いには文字は要らないと思っている。だが、フランクフルトのクララの家でハイジの考えは変わる。豪華だが山の見えない屋敷で心を病むハイジにクララのおばあさまは絵本を読んで聞かせ、続きを知りたいなら自分で読みなさい、と言うのだ。ハイジはそれまでまったく覚えようとしなかった文字を必死で覚え、絵本を音読することで標準ドイツ語を覚えていく。そしてそれまで話すことのできなかった標準ドイツ語で礼儀正しく挨拶できるようになる。だがありのままの自分を受け入れてくれると感じる大人には、挨拶だけスイスのドイツ語を使う。

心の病はますますひどくなる。ついに夢遊病になり医者の強い勧めで山に戻ってきたハイジは、高価な靴をすぐに脱ぎ捨てる。都会を捨てるとは貧しさに帰るということでもあるのだ。これが第三のメッセージである（同上）。彼女が山で維持するのは贅沢ではなく、教育により、物語を紡ぐ力を養う努力である。今度は冬になるとおんじと一緒に村に住み、学校に通う。物語を書く人になりたいと考えているのだ。

父親が12歳までヤギ使いだったという監督の力点は、当時のスイスの貧しさと教育の必要性を描くことにあると感じた。アルプスとフランクフルトを舞台とするこの作品で、個人的に印象深かったのは、クララの家の中の調度品の植物柄であった。屋敷の中は花瓶に飾られた高価な花、緑の植物、植物柄の赤いソファーとテーブル掛け、植物柄の壁紙など、植物で溢れている。産業革命の当時、緑が失われた都会では家の中に緑を取り込んだという（同上）。植物柄といえば、産業革命への危機感から生まれたイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動とそれに影響を受けたドイツのユーゲント・シュティールやウィーン分離派の流れが思い浮かぶ。ハイジにとっては家の中の緑は自然の代替にはならなかったのだが、山と都市を移動するハイジの物語の中で、クララの家とユーゲント・シュティールがつながって見えた瞬間であった。

文献情報（2017年2月～10月）

［2017年２月］

・Yanoula Athanassakis, *Environmental Justice in Contemporary US Narratives* (Routledge)

［2017年３月］

・勉誠編集部『書物学』第10巻（南方熊楠生誕150年）（勉誠出版）

［2017年４月］

・吉田美津『「場所」のアジア系アメリカ文学―太平洋を往還する想像力（松山大学研究叢書）』（晃洋書房）

［2017年５月］

・Alexa Weik Von Mossner, *Affective Ecologies: Empathy, Emotion, and Environmental Narrative (Cognitive Approaches to Culture)* (Ohio State UP)

・ペーター・ヴォールレーベン著『樹木たちの知られざる生活：森林管理官が聴いた森の声』（早川書房）

［2017年６月］

・塩田弘，松永京子，浅井千晶ほか編著『エコクリティシズムの波を超えて―人新世の地球を生きる』（音羽書房鶴見書店）

・結城正美, 黒田智編著『里山という物語：環境人文学の対話』（勉誠出版）

・Greta Gaard, *Critical Ecofeminism (Ecocritical Theory and Practice)* (Lexington)

［2017年７月］

・レベッカ・ソルニット（著），東辻 賢治郎（翻訳）『ウォークス 歩くことの精神史』（左右社）［*Wanderlust: A History of Walking*, Granta Books, 2014］

・Jason M. Wirth, *Mountains, Rivers, and the Great Earth: Reading Gary Snyder and Dogen in an Age of Ecological Crisis (Suny Series in Environmental Philosophy and Ethics)* (State U of New York P)

・Rebecca Ann Bach, *Birds and Other Creatures in Renaissance Literature: Shakespeare, Descartes, and Animal Studies (Perspectives on the Non-Human in Literature and Culture)* (Routledge)

［2017年８月］

・清水真木『新・風景論：哲学的考察』（筑摩選書）

［2017年９月］

・デイヴィッド・エイブラム（著），結城正美（翻訳）『感応の呪文―〈人間以上の世界〉における知覚と言語』（論創社）［*The Spell of the Sensuous: Perception and Language in a More-Than-Human World*, 1997］

［2017年10月］

・嘉田由紀子，新川達郎，村上紗央里ほか編著『レイチェル・カーソンに学ぶ現代環境論：アクティブ・ラーニングによる環境教育の試み』（音羽書房鶴見書店）

・下田健太郎『水俣の記憶を紡ぐ：響き合うモノと語りの歴史人類学』（慶應義塾大学出版会）

・Robert S. Emmett, David E. Nye, *The Environmental Humanities: A Critical Introduction* (MIT Press)

【シリーズエッセイ　風景のカタチ（3）】

地底の太陽――核のゴミを引き取るということ

小谷　一明（新潟県立大学）

今年５月、金沢で行われたASLE-J役員会後、高レベル放射性廃棄物の地底処分に関する学習会を行い、講師派遣は原子力発電環境整備機構（NUMO）に依頼した。名古屋大の地質学者が、地下は物質を変化させずに保管できる最良の空間であると説き起こし、それゆえに地底は核廃棄物の最適な処分場になるとNUMOの講師が話しをつなげる。地下500メートルの坑道は簡単に掘削できるという。

この処分方法が認められると、穴を掘れば掘るだけゴミの行き先が誕生し、原発を稼働し続けられることになるが、そのことにはふれられない。未来のエネルギー政策は論点にならず、各地で生まれている市民エネルギーの動きや、ヨーロッパなどにおけるグリーンエネルギーの現状も一顧だにされない。

311後、福島県で出たゴミを新潟市が受け入れ、焼却するという提案が行政によってなされたとき、焼却場のある地域住民は強く反対した。この地下処分では、東電や国の責任が問われているゴミも投棄されるのではという疑念がよぎる。こうした点もNUMO自らが口にすることはなかった。例会後にアンケートを渡されたが、地下は安全だと説明された私たちがどう反応するかをつぶさに見ているようで、何か心が落ち着かなかった。

学習会では地震大国でも地下は安全と説明されたが、最終処分場となれば米国のように搬入ルートを含む広範な地域住民は、強い懸念を抱くことになるだろう。これまで劣化ウラン弾の使用を含め、原発立国が核のゴミを国外や「辺境」に廃棄したり、しようと企ててきた歴史がある。その度に様々な反発を招いてきた。しかし、これに臆することなく、経産省資源エネルギー庁は処分場立地に向けた科学的特性マップを７月に公表した。

もはや先送りできないという前提で、最終処分方法を周知・確定したいということだろう。地下処分は新たな「安全神話」ではなく、データに基づく合理的な選択だという自信もあるようだ。自分たちで出したゴミは自分たちで処分すべきという「正論」への自信も感じられる。

全国大会の基調講演で田口ランディさんが話したように、原発を推進する政権を国民が選んできたのは事実だ。その意味では、六ヶ所村に再処理工場のある青森を除き、全国を候補地にすることは理に適ったことである。東電の放射能で汚染されたゴミの受け入れを拒否した住民が地域エゴと批判されたが、原発エネルギーの受給者が核のゴミを引き取らないことこそ、エゴと言われるのだろう。それでも「裏日本的」不安を抑えることは難しい。原発立地県が処分場になった場合、原発を稼働し続け、ゴミを地産地消のように埋めていくのだろうか。経済格差が処分場選定にまた利用されるのではないか。

米国のクリントン政権下で大統領令として示された環境正義は、有害施設なり有毒な廃物が、人種や宗教、所得などにかかわらず公正に差配されなくてはならないと命じる。米国環境保護庁（EPA）のHPにも掲載されているが、環境的な負荷の言わば公平負担法のような効力を有し、ロール・ヌアラ著『放射性廃棄物　原子力の悪夢』(2012, 原著2009)によれば、ブッシュ（息子）政権ですらネヴァダに最終処分場を押しつけることはできなかった。

科学的特性マップのHPでも、次世代に先送りしない、各地での説明会と対話を通し理解を求める、法的な段取りを重視する、といった文言が並ぶ。民主的で公正なプロセスを打ち出してはいるが、EPAのようにまずは環境正義という理念を政府はしっかりと提示すべきだ。原発のゴミだけに公平負担を求め、米軍基地の偏在が強いられる状況から公正への関心が高まるわけはなく、引き取る気持ちなどわき起こるはずもない。

こうしたことを考えながら７月に最終処分方法を研究する岐阜県の瑞浪超深地層研究所を訪れた。エレベーターで立坑を降り、目の前に現れた何億年も前の岩肌に手をあててみた。水気がありすべすべとしている。地底はまさに向こう側の世界であった。地下500メートルはマグマに近いのか、蒸し暑く、息苦しい。強いストレスが心身にかかってくる。地上に出た後、めまいに襲われた。上野英信が言う坑内熱中症のようなものだろうか。

上野が「ちそこ」と呼び、森崎和江が「まっくら」と表現した坑道。潜ってみるとそこは人類史から自然史へと抜け出る通路だった。2011年の燐光群の演劇でも舞台となった瑞浪の地底。そこには酸素を吸い尽くしながらも、仮死状態で生き続ける微生物がいるという。９月には地下300メートルでマグマ含有のメタンを食べて生き続ける微生物が発見されたという報道があった。無機物だけが支配するように見える世界にも、マグマという地底の太陽で生きようとするモノがいる。科学的特性マップの、黄色く枠取りされた日本列島の絵に縦の空間を思い描く。そこは人類史が自然史とせめぎ合う峻烈な場であった。

事　務　局　よ　り

■2017年度ASLE-Japan／文学・環境学会 第二回役員会・総会のご報告

平成29年８月24日（木）、25日（金）、清泉女子大学（〒141-8642 東京都品川区東五反田３丁目16－21）において第二回役員会が開かれました。まず、審議事項として、2016年度会計報告および監査報告、2017年度予算案についての議論があり、いずれも承認されました。続いて、一部役員改選案、全国大会案、執筆者分担金方針、会費未納者対応案が審議を経て了承されました。次に、ニューズレター第42号の発行、会誌第20号の進捗状況、現会員数（200名）、院生組織の活動、以上の報告がありました。なお、今年度の第23回ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会の詳細については、本ニューズレターに報告がありますが、三宅由夏氏、馬場理絵氏、高橋実紗子氏、笠間悠貴氏による院生企画、多田満氏、戸祭森彦氏、田中迅氏によるラウンドテーブル、松岡幸司氏、田中美保子氏、賀樹紅氏、戸張雅登氏、馬場理絵氏の個人発表、野田研一氏司会による渡辺憲司氏と小峯和明氏の基調講演、田口ランディ氏の基調講演があり、多数の一般参加者も加わった大変充実した大会となりました。大会実行委員のブルース・アレン氏、相原優子氏、相原直美氏にこの場を借りてお礼申し上げます。

■2018年度ASLE-Japan／文学・環境学会 全国大会開催のお知らせ

と　き：2018年８月下旬～９月上旬を予定
ところ：和歌山大学
（〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷930）
※スケジュール、プログラムにつきましては、詳細が決まり次第、会員メーリングリストでお伝えします。多くの会員のみなさまのご参加を心よりお待ちしております。

＜会費納入のお願い＞

2017年度の年会費（一般5,000円、学生2,000円）の納入をお願いいたします。

ゆうちょ銀行
口座番号　01300-0-93821
加入者名　文学環境学会
（フリガナ：ブンガクカンキョウガッカイ）

＜終身会員制度をご活用ください＞

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。現在、９名の先生方が終身会員となっておられます。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

＜会員情報の訂正・更新について＞

会員の皆様にお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに事務局・辻（twain1910★gmail.com）までご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

＜寄贈図書リスト＞

以下の書籍が事務局に寄贈されました：

- 『生きている道　ソローの非日常空間と宇宙』小野和人著（金星堂、2015年）
- 『エコクリティシズム・レヴュー *Ecocritcism Review*』No. 9（エコクリティシズム研究学会、2016）
- 『エコクリティシズム・レヴュー *Ecocritcism Review*』No. 10（エコクリティシズム研究学会、2017）
- 『エコクリティシズムの波を超えて―人新世の地球を生きる―』塩田弘・松永京子・浅井千晶・伊藤詔子・大野美砂・上岡克己編著（音羽書房鶴見書店、2017年）

広報より

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。
http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/
今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の塚田幸光（hiro2827★gmail.com）までお送り下さい。次回の更新は2018年５月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。

ASLE-J 広報委員　喜納育江、塚田幸光、松永京子

編集後記

メンバーの入れ替えがあったNL編集委員会でしたが、本号をお届けすることができ、ほっとしております。ご寄稿くださったみなさまに改めて御礼申し上げます。前委員のサポートにも感謝いたします。

2017年度全国大会の報告記事が中心となっていますが、産業廃棄物最終処分場建設をめぐりあらわとなった言葉の分断を見つめた巻頭言「言葉の伏流水」に始まり、原発のゴミ処分の問題を地底の風景から考えたエッセイに終わる本号は、生活の中で感じる「もやもや」や「落ち着かなさ」にも意味がある、と思い出させてくれた気がします。沖縄で米軍のヘリが民間地に落ちた10月に。

（M・T）

ニューズレター編集委員会では、会員の皆さまからのご寄稿（エッセイ、批評、書評など）、イベント・文献情報を随時募集しています。詳細については各編集委員にお問い合わせ下さい。

ASLE-J

【発　行】
代表　　結城正美
事務局　長岡技術科学大学　高橋綾子
〒940-2188
新潟県長岡市上富岡町1603－1
Tel/Fax: 0258-47-9805（直通）
E-mail: tayako★vos.nagaokaut.ac.jp

【編　集】
編集代表　札幌大学　豊里真弓
〒062-8520
札幌市豊平区西岡３条７丁目3－1
Tel: 011-852-1181（代表）
Email: toyosato-m★sapporo-u.ac.jp

（Eメール送信の際には、★を@に置き換えて送信してください）